宮脇幸生・戸田真紀子・中村香子・宮地歌織編著

『グローバル・ディスコースと女性の身体――アフリカの女性器切除とローカル社会の多様性――』

晃洋書房　2021年　186ページ

井口由布（いぐちゆふ）

本書はアフリカを対象地域とする人類学や政治学など異なる学術的背景をもつ研究者たちによる,「女性器切除」(female genital mutilation: FGM）問題を包括的に論じた日本語による初めての論集である。女性器切除の「グローバル・ディスコース」とは,「女性器切除は男性が女性を支配する『家父長制』のゆえにおこなわれ」,「女性の力をそこないアフリカの発展を妨げ」,「文化ではなく拷問と捉えるべき」という考えである（iiページ)。これに対し，アフリカでの調査を行ってきた著者たちは，このような強力な図式的理解にはおさまらない現地の多様な状況があることを強調する。

女性器切除の廃絶運動は植民地時代から開始され,戦後は国連機関が先導し，現地政府の多くは禁止法を導入した。女性器切除をめぐるグローバルとローカルの非対称性は，この実践をどう呼ぶかにおいて端的に現れている。中村（序章）によれば,「この施術を習慣としておこなっている／おこなってきた多くの社会では，男性の割礼と女性の割礼には同じ単語が使われている」のにたいして，女性器切除（FGM）という言葉は，欧米による廃絶運動の流れのなかで登場した（4ページ)。

廃絶運動は進展しているものの，現地の家父長制社会により根絶には遠い（戸田)。禁止をするだけでは根絶に至らず，地下へ潜ってしまうこともある（宮地)。女性器切除はイスラームと関係していると思われているが，これを義務とするのはシャーフィイー法学派のみで，現地宗教勢力と廃絶運動の関わりは複雑である（アブディン)。廃絶のためにはいろいろな手法がある。本書ではポジデビアプローチ（戸田）や代替儀礼（林）などが検証されている。

国際社会が女性器切除を廃絶しようとする理由の1つは，女性の健康被害である。宮脇は，女性器切除が女性の身体・心理に与える影響を論じている。面白いのは，女性器切除が性機能にもたらす影響の研究に関して，調査票の質問項目が「西欧におけるセクシュアリティを基準にして作成されて」いることへの批判である（22ページ)。この批判が示唆するのは，アフリカの各地域において西欧とは異なるセクシュアリティの基準がある可能性である。

本書は，女性器切除問題が遠いアフリカの他者の問題ではないことも強調している。コラムにある女性器の美容整形や男子割礼は，グローバル・ディスコースが二重基準であることを示している。戸田が指摘するように，アフリカだけでなく西欧や日本にも家父長制的慣習は残っており，女たちの身体は解放されてはいない。

2つのことを考察したい。1つはグローバル・ディスコースが，単なる事実誤認や虚偽を示しているのか，それともミシェル・フーコーのいう言説なのかである。前者であれば，虚偽のグローバル・ディスコースに対置されるローカルな多様性のほうはディスコースではなく，本物（実体）であると解釈されうる。後者であるほうが議論としては面白い。家父長制の抑圧の象徴としての女性器切除というディスコースによって，国連や現地政府のプロジェクトが実施され，現実が不断に変革されていくことになる。もちろんその過程は非対称な関係性のなかであっても一方的ではなく交渉的だ。植民地主義に抵抗して女子割礼を実践することや，サンブルの少女たちが「主体」的に施術を選択することは,グローバル・ディスコースという既存の枠組みとの対向性において行われると考えられる。

もう1つは，ローカルの多様性についてである。ローカルの多様性はグローバル・ディスコースとの接触とは関係のない独立した実体のようなものなのか，それとも接触を通して言説的に構築されるのか。宮脇が紹介した異なるセクシュアリティの基準や,「できるだけたくさんの男性と性関係をもって，できるだけたくさんの子供を産みなさい」という中村が指摘するサンブル社会の歌が示すセクシュアリティのありようは，前者か後者か。筆者はもっと踏

https://doi.org/10.24765/ajiakeizai.63.1_96
ⓒ IDE-JETRO 2022

み込んで，フーコーにならって，性やセクシュアリティというカテゴリーそのものが西洋近代において形成されたという視点を提起し，著者たちにアフリカのセクシュアリティ概念そのものの再考を期待したい。

（立命館アジア太平洋大学教授）